佳作

家族

鹿児島県　鹿児島県立国分高等学校一年　赤﨑　正太郎

ある日、私の妹が起立性調整障害という病気を患った。この病気は、朝起き上がることが辛くなったり、頭痛を引き起こす症状がある。この病気によって、妹は学校に足を運べなくなってしまい、いつも目にした妹の元気な姿も遠い昔の話になっていった。そんな中、一番妹のために動いていたのは、母だった。母は、妹のためにいつもこの病気について調べて、自分にできることのあらゆる手をつくして妹の治療に励んだ。しかし、その効果はいまひとつだった。そこに、ある番組が私たち家族の目に止まった。それは、足をふらつかせながら歩く、小さな保護猫たちの姿だった。その時、母がある提案をした。

「保護猫を飼おう。」

と。それは、妹は昔から猫が大好きで、猫を飼えば妹の心の支えになって、また学校に足を運ぶだろうと考えたからだ。さっそく妹にこの提案をすると、久しぶりの笑顔で「うん」と返事をした。

次の日、私たちはさっそく動物愛護センターに向かった。そこには多様な猫の姿があった。そこで妹が気に入ったのは、小さいながらも、とても元気に遊ぶ鍵尻尾のメスの子猫だった。私たちは、初めて猫を飼うドキドキする気持ちと命を預かる責任感をもって、その猫を保護した。始めは、単純に猫じゃらし等で遊んでいただけだったが、後に先住の犬とけんかをしたり、色々な場所に飛び乗って物を落としてしまったり、段々と命を預かる重たさを身に染みて感じた。そんな初めての経験に苦戦している中、妹は相変わらず楽しそうに子猫と遊んでいた。そこには、猫への計り知れない愛を感じた。

何日か経った頃、妹がついに学校に行く決断をした。しかし、まだ病気の影響もあって登校は午後からになった。それでも、私たちにとっては大きな進歩だった。学校から帰ってきた妹の瞳にはくもりが一切なかった。子猫という小さな命が大きな命の未来を突き動かす瞬間だった。助けられた存在が助ける存在になった。まだ、飼い始めて間もない頃だったが、子猫が家族の一員になったことを改めて感じた。この子猫が来て、これほどの変化が生まれるとは、誰も予想していなかっただろう。子猫はその持ち前の体力で家族に元気を振り撒くと同時に、一層の温かみを与えた。私たちはそんな子猫とこれから助け合い愛情を込めていきたいと思う。私たちは、この子猫が私たちに保護されるまで、どんな猫生を送ってきたか、まったく分からない。だからこそ、この子猫の第二の猫生が立派で華々しいものにしたいと思う。

この夏、私たちの家族は大きな変化を得た。一匹の子猫が家族の一人を大きく勇気づけて、私たちの新しい楽しみになった。私がこの出来事から学んだことは、家族とは互いを支え合う存在、小さな命が私たちに可能性を与えてくれるかもしれないということです。この経験を生かして、自分自身も助けられながらも、どんな命であっても助けの手を伸ばして支え合いをしたいです。